

風の物語

神野麻郎

自由に吹きぬけていく風の中に、ふと声を聞くことがある。風が木々に起こす音とはちがいで、地面や人工物を擦っていく音ともちがう。それは風自体に包まれていて、風が自由にふるまう、その裂け目からふとこぼれ落ちる、そんなふうだ。一瞬のことだ。何かの言葉のざわめきのようでもあり、短い叫びのようでもある。しかしはつきり聞き取れたためしはない。意味は不明で、ただ嘆きのような、ある深い感情だけを伝えてくる。天を仰ぐ巫女の埴輪の、歪んだ口から発された声は、そんな声だったかとも思える。

昔、風の強い日に、浜辺で友だちが海に向かって叫び続けるのを、少し離れた場所で見聞いていたことがある。ある女の子の名前の切れはしが、不思議な強弱と長短で流れてきた。それは明らかに風の作用だったが、距離があったので、まるで風自体に包まれた声のように聞かれたのは似ている。でも今言っているのは、今現に生きて近くに誰かの声ではない。姿のないものの声だ。いや、かつては姿があったかもしれないが、今は姿をなくしているものの声だ。それは、時を超えてやって来るのかもしれない。

そんな声を聞くと、ぼくの中に不思議な感じが起こってしまう。かつてこの同じ場所に暮っていた人々があり、その声だけがどこか天空の裂け目か隙間に包まれて残っていて、風の吹くぐあいであふとそれが洩れ出てしまうということがあるのではないだろうか。そうかつての人々の存在と不在に思いが及ぶと、自分の存在が相対化され、今かたちある自分のこの生もほんのわずかな間のことなのだ、と気づいたりする。ありとあらゆるものはすべて過ぎゆき、住み変わってゆくのだ、と思えてしまう。それを、「無常」、の感じとっていいのだろうか。

でも、そんな風の裂け目からこぼれ出たような声を聞くことは、めったにない。

ウーシャザン

呉小玲と出会ったのは、九月なかばのある休日、平城宮址でそんな風の声を聞いた直後だった。例によってぼくは身体の動きを止め、その一瞬のざわめきを反芻し、なおも耳を澄ませようとしていた。広い野原のような宮址の、大極殿址の礎石の一つに座って足を投げ出し、南方の朱雀門の方を向いていたところだった。他人の目には、ただ休んで、ぼんやりしているとしか見えなかっただろう。だから、呉小玲は後で、その時私は「道を教えていただけませんか？」とはつきり言ったのに、ぼくがうつろな目で自分を

見上げるだけなので、少し気味が悪くなった、気軽にたずねたことを後悔したと言った。でもそう呉小玲が笑いながらうち明けたのは、一人が親しくなった、だいぶ後のことだ。

でもぼくはぼくで、その出会いの場面をはっきり覚えていて。少し仰向いて、まだ強い日射しを浴びながら風の残した声を耳の奥で反芻していたとき、ふと目の前の光がかげつて、そのカゲが何かしゃべったのだ。その時ぼくの中で、風の残した声とそのカゲがつながってしまった。その短い叫びのようなものを、目の前のカゲが発したように思えて驚いたのだ。

でもそれは一瞬のことだった。我に返ったぼくは、目の前に、やや長身で細身の、薄いピンク色のリュックを背負いジーンズをはいた、でも女の子というには少し齢をとっている女性が身をかがめているのをさとった。「え？」と訊き返した。彼女は、「道を教えていただけませんか？」と、やや退くような姿勢でたずねた。

「ああ」と、ぼくは立ち上がった。顔を見合わせ、次には少しかがんだ。彼女の示した地図を見るためだった。彼女は、つまり唐招提寺まで行く道をたずねているのだった。電車かバスでどう行くのかと訊いた。ぼくは説明しながら、地図の上に指で一通り行き方を描いてみせたが、でも今からではもう拝観できる刻限に間に合わないだろうともつけ加えた。あたりはまだ十分明るかったが、時計は四時をまわっていた。すると彼女は、「ああ、そうなんですか」とため息をついた。その表情がいかにも残念そうだったので、ぼくはとっさに、自分がバイクで来ていること、バイクでなら何とか拝観の刻限に間に合うだろうと試みてみた。もちろんタクシーをつかまえてもよいわけだが、一人で散策しているようだし、観光場所にタクシーで乗りつけるような人には見えなかった。

彼女は、ほんのわずかな間ぼくを見さだめるようだったが、それが相手に嫌な感じを与える前にすぐ笑顔になって、「では乗せてください。お願いします」といった。絶妙のタイミングだった。頭のいい人だな、とぼくは楽しくなった。

結局拝観の刻限には間に合って、いっしょに境内を急ぎ足でまわった。彼女は金堂の魁偉な千手観音像や神聖さのただよう戒壇がとくに気に入ったようだった。帰りは近くの私鉄の駅までやはりバイクで送ったが、ぼくはそのまま別れてしまうには惜しい気がした。

たぶんそれはこんな理由だ。短い時間だったが、境内をいっしょに巡っているうちに、彼女の景物を見るまなざしやその感想をもらす言葉の端に、自分のそれと同質なものを感じた。それはべつに専門的というのではないが、まったく観光気分でもの表面を眺めて満足するのも違っていた。対象に向かえば、五感全部でその本質を感じよう、交わろうと努める感じがあった。たとえば、金堂の基壇の端から、八本の円柱の並びと庇や梁が作り出す階調の美しさを飽かず眺めていた。また戒壇では壇上に授戒する鑑真の姿

を想像していた。そうした姿からはどこか真剣な感じが伝わってきた。それにぼくは興味がひかれたのだ。もともと、彼女の異性としての魅力的な面差しや上品といってもいいものごしに惹かれたのも事実だった。それで、「ありがとうございます。とても助かりました」と頭を下げる彼女を、「失礼かもしれないが」と断りながら駅前の喫茶店に誘うと、幸い笑顔で応じてくれた。

少し古い感じの喫茶店で、入るとビートルズナンバーを低く流していた。客はほかに一組だけで、奥のボックス席で新聞を広げていた中年の男が、いらっしやいと言って立ち上がった。

そこでの話は、意外な方向に展開した。まず名前を言い合って、彼女が中国人であることを初めて知って驚かされた。彼女の日本語はとても流暢だったし、顔かたちからも区別がつかなかった。日本語の自然さに対するぼくの驚きは、彼女の滞日年数や経歴を聞いても消えなかった。彼女は上海の大学の日本語科を卒業した後、六年前留学生として来日し、大阪のある大学の大学院で日本語を研究し、そして去年から関西の数校で中国語の非常勤講師をしているといった。そして、日本の古典文学が好きなので、休日には京都や奈良によく出かけるのだとも。

呉小玲のことを聞いたので、ぼくも自分のことを手短かに紹介した。大阪のある電気製品のメーカーに勤めていること、でも学生時代から奈良の散策が好きで、就職して以来奈良市に住みついていることなどを語った。たまに歴史物の小説やエッセイの習作を書き散らしていることは趣味の領域のことなのでいわず、古代史や古代文学に興味をもっているだけ告げた。

「唐招提寺は門を入った瞬間、今まで訪れたどのお寺よりも、中国の感じがしました。伽藍の配置や境内の印象もそうでした。鑑真は故郷の揚州のお寺に似せて唐招提寺を建てたのでしょうか？」と呉小玲がいったことをきっかけに、話のテーマはいわば古代における日本と中国の交流のようなことになった。鑑真の故郷や活躍した地域が彼女の故郷に比較的近いことも話はずませた。鑑真のことを書いた古い書物があるかとたずねられたので、短いものだが、奈良時代末期に書かれた「唐大和上東征伝」というものが残っていると答えた。淡海三船撰の「唐大和上東征伝」は原文を入手して、漢文をたどらどしく追いながら二、三度通読したことがある。鑑真が日本の朝廷の招きに応じて渡海を決意する場面、しかし風浪などのために五度も失敗して失明するに至る場面、それでも次の遣唐使の招きを受けてあらためて渡日を決意し、ようやく渡日すると授戒の師として圧倒的な歓迎を受けた場面などは何度読んでも感動的だ、そういうことを彼女に語った。彼女も鑑真の伝記についてはおおまかには知っているようだった。

呉小玲とのそうした会話はすばらしかった。彼女は上手な聞き手だった。ぼくがしや

べるのをきまじめな表情で聞き、時々短く適切な質問を返した。あいまいな笑みは浮かべなかったし、すぐうちとけるといふふうでもなかったが、話の内容を深く受け止め、反芻するようだった。ぼくの発する言葉は漏れなくそのくもりな瞳に吸収されていくというふうで、すがすがしかった。

そのころぼくはたまたま、その鑑真を招請し、船に乗せた遣唐大使に興味をもっていった。少し込み入ることだとは思ったが、会話が楽しかったので、つい調子に乗った。

「その時の遣唐大使は、藤原朝臣清河ふじわらのあそみきよかわという男でした。藤原北家の房前の四男、あの大化の改新の立役者の一人、中臣鎌足の曾孫、藤原不比等の孫にあたります。遣唐大使として唐の国に渡ったのが天平勝宝四年の春のこと、西暦では七五二年、清河三十五歳の男盛りでした。ちょうど、あの東大寺の大仏の開眼会が行われた年です。唐では時の玄宗皇帝にも謁見し、その風采や礼儀が立派だと褒められたりした。

鑑真を招請して帰国の途についてのが翌年の冬、揚州のあたりから四隻の船で出発し、三隻までは何とか沖繩までたどり着きました。鑑真らの乗った第二船はそこから九州まで帰ることができたのですが、しかし大使清河らの乗った第一船はそこで座礁。たぶん船乗りには、沖繩の島を取り巻くサンゴ礁の知識が乏しかったのでしょう。再び船出をしたが、強風に流され、今のベトナムのあたりに流れ着いた。そこで土民に襲われ、ほとんどが殺され、船も奪われたそうです。ただ清河ら十数人はようやく逃げ、結局また長安の都に舞い戻った。それから二十数年、清河は唐の国で生き、ついに日本に帰ることなく、彼の地で死にました」

「だいたいこんなことを説明した。呉小玲はため息をついた。そして、一言、

「まるで阿部仲麻呂あべのなかもろのよう」といった。

「そう、阿部仲麻呂。仲麻呂は唐の国で客死した男としてもっとも有名ですね。清河と同じ時代です。実際、揚州を出発した第一船の中に、仲麻呂も乗り込んでいたのです。

清河のそばにいたのです。仲麻呂は七十七年、二十歳で留学生として唐に渡りましたから、七五三年にはもう五十六歳ですね。在唐も二十数年に及んでいたわけです。有名な、『天の原 振りまり放はなつれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも』蘇州のあたりで送別の宴で詠んだとされている歌ですね。その仲麻呂も、清河と行をともにしてかろうじて命は助かったのですが、ついに帰国はかないませんでした」

「おもしろいですね。清河と仲麻呂……」と呉小玲は瞳を輝かせた。思えば彼女も、古代の阿部仲麻呂と同じ留学生なのだった。留学の方向も時代も違うとしても。

「で、あなたは、その清河のどこに興味をもっているの？」

よい質問だった。それに、呉小玲の言葉づかいや表情が、友だちに対するように少しほぐれてきたようなのも嬉しかった。

「ええ。清河はたぶん、七七八年ごろまで生きた。六十数歳までね。その二十数年の間、彼は日本に帰ろうと思えば帰れたのではないかと思うのです。現に、日本の国では清河を迎えることだけを目的とした遣唐使まで派遣したくらいだから」

「ということは？」

「ええ。いつのころからか、清河は日本に帰ろうとしなくなった。何かの理由で母国に帰りたくなかった。これはぼくの推理です。史料のどこにもそんなことは書いてないけど」

呉小玲は少し複雑な表情をした。その時ぼくがただ清河のことだけを念頭にしゃべった言葉が、彼女の心にどう作用したかなどは知るべくもなかった。

「またおもしろいことに、清河が客死した後、七七八年のことですが、時の遣唐使が帰ってくる船で、清河の娘が日本に来ている。もちろん清河と中国人女性との間にできた子供です。喜娘きじょうという名前です。それがどんな娘であったか、どうして日本に来たのか、来た後はどうしたのか、そこにも興味がひかれるんです」

数瞬あつて、ずっとぼくの顔を見まもっていた呉小玲の表情が急に明るんだ。

「川村さん、あなたの清河の話は大変おもしろいです。できれば、後日もっと詳しく聞かせていただけませんか？ご迷惑でなければ、ぜひお願いしたいです。と申しますのは……」と丁重にいつて、彼女が話したのはこういうことだった。彼女には上海にテレビ関係の仕事をしている兄がいる。彼は、中国で日本への関心も高まっている折から、中日の交流をテーマにしたドラマを作りたいという希望を持っている。彼は以前、日本に留学している彼女にそのことを伝え、何かよいテーマがないか探すよう依頼してきた。彼女も長くそれを気にかけてきたが、今までのところはあまりよいテーマを思いつかなかった。でも今の清河と喜娘の話はそのよい素材になるかもしれない、というのだ。

今度はぼくが古いコンピューターのように数瞬考えた。それは仕事の上で、未来の予定表に、急に降ってわいた新しい予定をいくつか書き込んでみて、それが全体にどういう影響を及ぼすのか判断する作業に似ていた。新しい予定はウイルスのように作用して、他の予定や未来の全体の性質をも書き変えてしまうことがある。でもそんなことをするまでもなく、気持ちは決まっていたのだ。

「わかった。そうしましょう。おもしろそうだ」

ぼくたちは次に会う日時と場所を決めた。ぼくは彼女のさし出してくれた紙の切れ端に名前と住所、電話番号などを書いて渡し、彼女からはきれいなクリーム色の名刺をもらった。

店内に流れる曲は、いつの間にか今はやりのポップスに変わっていた。外に出るともう蒼い闇で、風が涼しくなっていた。

次の二週間はいつものおだやかな日常が続いた。平日は朝々、大阪の郊外の都市にある会社に通って、午後八時、九時ごろまでをそこで過ごし、退社するとたいていまっすぐ奈良市内のアパートに帰る。仕事の疲れで、夜は十二時過ぎには寝てしまう。このサイクルの中にはあまり趣味の入ってくる時間の余裕も気力の残りもない。ただ朝晩の通勤途中、奈良の古い町並みを歩き、空気を呼吸することがわずかに古都のムードにひたらせてくれる。それを味わうためにこそ、長い通勤時間をしのび、会社の同僚にもいぶかられながら奈良に住み続けているともいえる。半日、あくまで機能性と合理性でつらぬかれたオフィスや工場の空気の中で暮した帰り、築地や瓦屋根にうつる月影を見るようなアンバランスさがなぜかぼくには心地よい。

毎週二日ある休日のうちの一日は、たいていアパートでゆっくり過ごす。一週間分の洗濯や掃除をした後は、テレビを見たり音楽を聴いたり本を読んだりするだけだ。パソコンは職場で飽き飽きしているので、あまり使わない。他の一日はどこかに散策に出かけたり、友だちと会ったり、歴史小説の草稿を書き散らしたりする。近くの公共図書館に出かけることもある。

去年、かなり長くつき合ったある女と別れて以来、一年余りもこんな暮しが続いていた。意識の内部にたえず異性が住みついていている場合の、細かく濃密な時間の流れや彩りのある空間が失われてみると、はじめのうちはその単調さにとまどったが、やがて自由感のたっぷりある生活、しかも起伏乏しく流れていく時間に馴れた。馴れてしまうと、べつにこれといった不満もないおだやかな暮しだった。時は週の単位でとどこおりなく、それなりにリズムミカルに流れていった。

呉小玲は、ぼくのこんな暮しの中に、静かに入り込んできた。

二週間後の日曜日の朝、ぼくたちは近鉄奈良駅で待ち合わせた。呉小玲は前とは変わって、ベージュのスーツをセンスよく着こなしていた。ぼくがTシャツにジーンズという軽装だったので、これではちぐはぐだなととっさに思ったが、べつにデートではないのだと思っ直した。

デートではなかったが、ぼくたちがその日いっしょに歩いたのは恋人たちがごくふつうに訪れる場所だった。興福寺の境内から猿沢の池を巡り、奈良公園の中をゆっくり歩いて春日大社に出た。晴朗な秋らしい日で、どこも観光客でにぎわっていた。

春日大社に向かったのは、そこが遣唐大使清河にゆかりの場所だったからだ。七五二年の春、藤原氏は自分たちの氏神を祭る春日の地に参集し、清河らの旅の無事を神に祈った。その折に清河が詠んだ歌も残っている。

朱塗りの本殿の前の日陰で、ぼくはリュックの中から一枚の紙を取り出して呉小玲に

渡した。「万葉集」からコピーしたものだといった。彼女は紙の方に向つむくとたちまちそれをすらすらと読んだので、さすがに日本語専攻だと感心した。

春日にして神を祭る日に、藤原太后ふじはらのおほみかひの作りたまふ歌一首 すなはち、入唐大使藤原朝臣清河に賜ふ

大船に ま梶しじ貫ぬき この吾子あごを 唐国からくにへ遣やる 齋いはへ神たち

大使藤原朝臣清河の歌一首

春日野に 齋いづくみもろの 梅の花 栄えてあり待て 帰り来るまで

読み終わって、「言葉がむずかしい」とややほにかんだ。ぼくは少し説明する必要を感じた。

『藤原太后』というのは、光明子のことです。聖武天皇の後、藤原氏の出で、清河には叔母にあたる。だから清河を『この吾子』と、自分の子供のように呼んだのでしょうか。神々よ、危険な航海に乗り出すわが子を必ず守ってやってくれという、母のような気持ちがあらわれていますね。当日は、清河らの旅の無事を氏神に祈るために、藤原氏の有力な人々がみな集ったのでしょうか。その当時栄えていた藤原一門を代表して、光明皇太后が歌を贈ったのですね。

それに答えて清河が詠んだのが次の歌。その時は初春で、梅の花がこの春日の地に咲いていたのでしょうか。今はこのあたりには梅の木は見あたらないようだけど。その梅の花の栄えにこと寄せて、自分の留守の間の一門の無事と繁栄を願ったのですね」

こうすらすらと語れたわけではないが、まとめるとおおよそこうなる。呉小玲はただどしいぼくの説明をさえぎりもせず、きまじめな表情で資料とぼくの顔を交互に眺めていた。その色白の横顔を、回廊の朱色や日の照り返しが美しく映えさせていた。

「川村さん、清河のころ、遣唐使の旅は非常に危険だったのでしょうかね？」

「そのようです。遣唐使の事故の記録はいくつか残っている。たとえば清河たちの一つ前の遣唐使は、やはり唐からの帰りが悲惨でした。大使の船は何とか種子島に漂着したのですが、四隻の船のうち、ついに二つの船は帰らなかつた。その二つの船のうちに乗船していたある男が、数年もして北方の渤海を経由して帰り、奏上した内容が史料に残っている。それによれば、その男の乗った船は遠く南方のマレーシアのあたりまで流され、ある者は殺されある者はマラリアにかかって死に、百人余りもいたうち、助かったのはわずかに四人だけだったそうです。清河たちが使をしたときにも、その経験があらためて思い出され、恐怖をかきたてたでしょうね」

「なるほど、わかります。ですから歌は、とても真剣に無事を祈っているのですね」

また奈良公園の方にもどり、公会堂の一階のレストランで昼食をとることにした。落ち着いた感じの石畳みの庭からは、背後にひかえるまだ緑濃い若草山、西北方に薨を輝かせる大仏殿がおもしろい距離感で眺められた。やや遅い時間帯で、店内は混雑が過ぎ去った後のようだった。注文した料理がくるまで、呉小玲はさつきぼくが渡した資料にあらためて視線を落としていた。そして、

「もう一つ、清河の歌がありますね。『あらたまの年の緒長く 吾が思へる 子らに恋ふべき 月近づきぬ』。これはどういう意味かしら？」

「長の年月、ずっと愛し続けてきたわが妻と別れて、遠くで妻を慕うことになる、その別れの月がもう近づいた、だいたいそんな意味でしょう。やはり出発前、従兄の藤原仲麻呂ふじわらのなかの家に招かれて、その宴で詠んだ歌ですね。藤原仲麻呂はそのころ、天下第一の権力者だった」

「ロマンティックだな。奥さんにこんなにやさしい……。宴だから、多くの人がいてこの歌を聞いていたわけでしょう？中国の伝統では考えられないわ。別れのときの詩は、もちろん中国にも昔からたくさんありますが、みな男どうしの詩です。夫が妻に、ではないわ。清河という人は愛妻家だったのですね」

ぼくは笑いながら、

「さあ、どうかな。そのころ、別れの歌は誰でもそう詠むべきものだったのだろうと、ぼくなんかはちよつとクールに見てるな」

軽くいったつもりだったが、「そう」と呉小玲の声は思いのほか小さくなってしまった。ぼくは少しあわてて、

「いや、ぼくのはかえって皮相な見方かもしれない。なるほど歌の意味は、清河の本心のあらわれとしてそのまま受け取るべきかな。実際、妻との別れはつらかったでしょうからね。出発すれば命の保証はなかったわけだからね。そして、事実、二人はもう再会することはなかった」

「生きながら永遠の別れをする。つらいことですね」

「つらいですね」

「きつと晴れがましい、はなやかな出発だったのでしょう？その中で人々は悲しむ。こんな別れはとてつらいですね」

呉小玲は自分が中国を出るときの人々との別れを重ねているのかもしれない。

食事のとき、ぼくは話題を変えて呉小玲の日常について少し話した。彼女は週四日、大阪や神戸の大学に中国語を教えるに行っているが、ちよつと授業に苦労していると言った。

「日本の大学生はあまり勉強しませんね。目的意識が乏しいというのか。それで私、授

業中、よく怒ります。せっかく親に高い授業料を出してもらって大学に来ているのに、どうしてもつと勉強しないのって、はつきり言う。だから、学生に怖がられています」といって苦笑した。ぼくも笑いながら、教室での真剣な彼女を想像した。そうして大学の講師をしながら、一方では専門の日本語についての論文を書き、やがては博士論文を仕上げるつもりだと彼女は語ってくれたが、その専門に関する書物の名前や研究テーマの内容は、残念ながらぼくの耳をすりぬけていった。

彼女は、大学院で学んだころの指導教官のことも口にした。その教授には現在も時々指導を受けているが、少し困ったこともある、とうつぶいた。それを見ながら、軽率なぼくの頭はすぐ邪推に走ったものだが、それがまったく的外れでなかったことは後にわかった。

食後、ぼくはまたリュックから別の資料と一冊の本を取り出して呉小玲に渡した。資料は「続日本紀」や研究書からのコピーで、近年少しずつ集めたものだった。とはいえそれほど多くはなく、二十枚ほど。本は江戸時代の刊本の影印版「唐大和尚東征伝」で、これも薄いもの。ぼくの書き込みがあったが、彼女に貸すつもりだった。彼女は丁寧に礼をいって受け取ると、すぐそれらを珍しそうにめくりはじめた。「唐大和尚東征伝」はむろんのこと、資料も漢文が多いので、彼女の方がぼくなどよりもよく読めるはずだった。実際、「うーん、古典はむずかしい」といいながらも、早口な中国語の小声がかなりのスピードで行をたどっていた。

そのレストランには、結局二時間以上も居座った。そしてある相談がまとまった。それは、呉小玲はこれから、ぼくの渡した資料や本を読み進める、そしてテレビ用の脚本にはすぐにはならないまでも、上海にいる彼女の兄に送るために脚本の下書きのようなものを書き始める、ぼくがそれにアドバイスをすると、といったものだった。そしてぼくは中国語を彼女から学ぶ。

呉小玲は自分の用事のためにあなたの時間を拘束するのは申しわけない、と何度もすまなかつた。それは一向にかまわない、あなたとこうして会って友だちとして話ができるのは自分にとつてとても楽しいことだ、それに古代の歴史はぼくの趣味だからぼくの考えを人に聞いてもらえるのも嬉しい、と言ったのだが、彼女はなおも自分の気持ちですまないと納得しなかつた。それで、結局彼女の提案で、ぼくの方は彼女から中国語を習うことになったのだ。中国語は学生時代に一、二年ラジオ講座を聞いていたことがあったが、身も入れなかつたし、もうすっかり忘れていた。勤め先のメーカーも中国に工場を持っているし、このところ取引も増えているから、いつかは役立つかもしれないも思えた。でもぼくは少しクギをさす必要を感じた。

「あなたにとつて、怠惰な日本人学生がもう一人増えることになるわけですが、それで

もいいのですか？」

「けっこうですよ。特別に、あなたには怒らないことにしましょう」と呉小玲は笑った。時間は原則として月に二回、日曜日の午後と決まった。場所が問題だった。毎回喫茶店では落ち着かないし、公共図書館でもむずかしかるう。それでどちらかのアパートでということになり、奈良の散策もできるからというわけで、結局ぼくのアパートに彼女が訪ねてくることになった。要するに二人にとって、小さくて気ままな「研究会」が一つできたというぐあいだった。

帰りはぼくのアパートの方に寄り道をした。呉小玲にアパートの場所を覚えておく必要があった。途中の路地を歩きながら、彼女は道に沿うせせらぎや築地や少し色づいてきた木々を眺めて、

「今まで住んだ大阪のどの場所とも感じがちがうわ。奈良はさすがに古都ですね。風情がありますね」と珍しがった。

「風情」か、久しぶりに聞く言葉だなと思いつながらぼくは、

「あなたがこの町を気に入ってくれて嬉しい」とさも古くからの住人のように答えたものだ。

「おかげで今日はとても楽しかったわ。ありがとう。これからも、私、『研究会』を楽しみにしています」

ぼくも同じ気持ちだった。何か呉小玲を通して、新鮮な未知の世界にふられそのような期待感があった。それにぼくの陳腐な趣味が一つのきっかけとなり、そうした世界を引き寄せてくれそうなのは不思議でも意外でもあった。

近鉄奈良駅まで呉小玲を送るころには、少し風が冷えていた。笑顔を残して彼女が去った後、ぼくは早速中国語の教材を探しに近くの本屋へ向かった。

藤原清河はなぜ帰朝しなかったか？

先にも書いたように、それがぼくの清河についての疑問と興味だった。この疑問と興味について詳しく答えてくれる書物は、公共図書館や大阪の大きな書店で探した範囲ではなかった。清河にふれた研究書や論文のコピーもいくつかそろえたが、それらは、結局清河を、帰国したくても諸般の事情でできなかった人物として描いていた。つまり、阿倍仲麻呂のようにだ。ぼくはそれに不満だった。たしかに清河は一度帰朝しようとして沖繩まで達した。でもそれは遣唐大使としての公務であり、大使として渡った翌年のことだ。それからベトナムあたりまで流され、阿倍仲麻呂らとともに長安に舞い戻った。そして唐朝に仕えて二十数年。唐の朝廷は彼を厚く遇した。長安の都で、ある自由さの中に置かれただろう清河は、いったい何を考えたか。

藤原清河という男は、育ちよく、教養深く、繊細なところもある、文人気質の人物だったとぼくの目には映っている。もともと名家、藤原北家で、何不自由なく、教育環境にも恵まれて育った貴公子だっただろう。彼は青年時代、相当に漢籍に親しみ、たつぷりと中国的教養を身につけたようだ。唐朝で玄宗皇帝に気に入られたとき、清河らはその褒美のように、宮廷の貴重な典籍や宝物を大量に蔵する府庫をくまなく見せてもらっている。数年後清河に与えられていた官職は「秘書監」ひしよかん、つまり宮廷所属の龐大な図書や秘籍を管理する役所の長官、いわば国立図書館長だった。また日本の朝廷は、清河を在唐のまま「文部卿」に任命してもいる。すべて清河の文人的教養を推測できる資料だろう。

むろん、清河には政治家としての側面がある。遣唐大使に任命されたころは、すでに参議として台閣の重要な一員だった。父の房前ら、藤原四卿が相次いで天然痘に倒れるというアクシデントから立ち直つてようやく勢力を挽回してきたそのころの藤原一門で、清河はホープの一人と目されていたはずだ。しかし、清河の人となりは、あの一回り年上の従兄、権力欲旺盛な藤原仲麻呂などとはちがって、政治家よりもむしろ文人肌ではなかったか。

唐時代の長安の都。ものの本にいくらも書かれているように、そこは世界の文化の坩堝だった。四方の国々からさまざまな人種や文物が集まっていた。人物も多士濟々。十世紀のパリを思い浮かべればよいだろうか。いや、スケールはそれよりもっと大きかっただろう。そのあこがれの世界の中心に身をひたし、書物の海に身をうずめているうちに、故国のかげは薄れていった。故国を思う時、それは東海の果ての田舎っぽい島国としか見えなくなった。それはいかにも小さく貧しい。その中で、従兄の藤原仲麻呂らが醜い権力闘争を繰り返している。彼は、妻や子供のことはなつかしんでも、そうした故国に帰っていく意志をいつの間にか失ってしまったのかもしれない。

いや、むしろこう考えるべきか。異文化体験は、彼の個人としての自覚を促したただろう。そして彼を一人の素朴なナシヨナリストから一人の新しい個人主義者に作り変えた。その彼はもう日本国や大唐帝国にこだわらず、ただ個人として世界に生きた。

当時、留学生や留学僧の中で、帰国を拒んだ者たちも実はいくらかいたらしい。広大な大陸のどこかに行方知れずになった男たちもいる。それを後世の歴史家は、個人的資質や運命のせいで道を踏み迷った哀れな男たちと見たりしているが、ぼくにはそれは皮相な見方だと思える。国家を基準とするからそう見えてしまうわけで、個人を基準とすれば必ずしも彼らを落伍者とは決めつけられない。

明治の国費留学生たちがそうであったように、異文化体験はそれぞれの個人性を激しく揺すぶっただろう。同時に彼らが背負わされていた国家の観念をも揺すぶっただろう。

そして中には、帰国して母国のために尽くすこと、あるいは母国の体制の中で在唐経験を武器に自らの出世や栄誉を求めることを第一の価値とは信じられなくなった者たちもいたにちがいない。大陸のどこかに行方知れずになったのではないが、精神的には清河もそんな個人に目覚めた男だったのではないか。あの、望郷の悲劇ばかりが有名になった阿倍仲麻呂の中にだって、在唐半世紀余の星霜のうちにはあるいはそうした意識がたくましく根づいていたかもしれない。

個人主義者、藤原清河……ぼくの中にはそんな清河像がしだいに育ちつつあった。

月に二度くらいのわりあい、呉小玲はぼくのアパートを訪ねてくるようになった。約束の時刻になる前に、ぼくは居間兼書斎にしている部屋を掃除し、いつもは壁に寄せたある座り机を部屋のまん中に引き出す。落ち着いたクラシックのCDなどを低くかけておく。呉小玲は駅に着く前に必ず携帯電話からメールをくれる。それはよい習慣だと思えた。心が彼女を迎える準備をする。部屋の換気もできるしコーヒーマーカーのスィッチも入れられる。

呉小玲はいつも少しぎこちない感じで、でもにこやかに入ってくる。短い挨拶をかわした後、すぐ机の前に座る。上海から届いた物を手土産に持ってきてくれることもあった。ぼくはキッチンからコーヒーを運び、呉小玲の前に座る。彼女と向き合うその最初の瞬間がぼくは好きだった。彼女はぼくを笑顔で見つめる。まだ頬が上気している。しばらく違った日常生活を生きてきた二人が、また感情を結び合わせようとするその瞬間はいつも新鮮に感じられた。少しとりとめない話をした後、小さな「研究会」を始める。二人はたいてい二時間くらい、それに熱中した。

もちろん、その時間は予想通りとても楽しかった。おびただしい言葉をキャッチボールしながら、ぼくたちは清河の時代に遊び、古代の日本と中国への想像に耽った。二人の会話はいつも静かに始まるのだったが、そのうち熱してきて感情がこもったり、あるいは考えに沈んで黙りこんだりした。呉小玲は時おり立ち上がり、窓辺で深呼吸をしたり、キッチンに立って紅茶を入れてくれたりした。

机の上や周辺に資料や書物がしだいに増えていった。中でも中心になったのは、二人の意見交換をもとにして呉小玲が毎回パソコンで打ち、事前にメール添付で送ってくる、清河をめぐる物語の脚本の簡単な下書きだった。資料から読み取られた情報が、二人の頭と会話を經由することによって物語の場面に變形され、設計図の適切な位置にセットされていくのだった。

その物語は、やはり清河の出発前から始まっていた。

七五二年（日本の年号では天平勝宝四年）、初春。日本。平城京の郊外、春日での藤原氏一門の神祭りのシーン。

光明皇太后がいる、仲麻呂がいる、清河の兄弟や妻や子供がいる。梅の花が咲き誇っている。神主が神前に供物や幣帛をささげ、うやうやしく祝詞を唱える。

終わると光明皇太后の歌が朗々と詠じられる。「大船に　ま梶しじ貫き　この吾子を唐国へ遣る　斎へ神たち」（中国語に翻訳が必要。字幕にする。以下も日本語の場合は同じ）。かしこまって聞く、清河。その顔は知的で若々しい。

歌を返す。「春日野に　斎くみもろの　梅の花　栄えてあり待て　帰り来るまで」。カメラは同時に梅の花をクローズアップ、のどかな大和の春を強調する。

ここで、藤原仲麻呂の歌も披露して、仲麻呂と清河の近しさを示しておく。仲麻呂は中年でやはり立派な風采だが、少しぎらぎらした感じを出せる俳優がいい。

次に宮中での節刀授与の場面。

御簾の内の孝謙女帝から直接言葉があり、清河はひれ伏して聞く。女帝の声は、ややかん高い方がいい。天皇の使者であるしるしの節刀が、仲麻呂の手を経てうやうやしく授与される。

ここで、後の展開のために、副使のおむせのこまろ大伴古麻呂ときびのまきび吉備真備の姿も写しておきたい。大伴古麻呂は古武士の風格、真備は学者然としている。二人とも年長け、二度目の渡唐なので落ち着いている。清河の貴公子然としたたはずまいと対照させる。

宮城を出るともうその足で、遣唐使たちは難波へと出向いてゆく。春三月、生駒山を越えてゆく一行に、遅い桜の花が散りかかるシーンもいい。

そして難波の港。

別れの場面。出港。水夫たちがいつせいに櫓を漕ぎ出す。その威勢がよいけれども、どこか悲しみを帯びた掛け声。デコレートされた四隻の船が水脈みおを引きながら出てゆく。手を振り、袖を振り合う人々、涙ぐみ、まだ少女のわが子に寄り添っている清河の妻。

そばで、たった一人の息子を送り出したある母親が、叫ぶように歌っている。「旅人たびびとの宿りせむ野に　霜降らば　吾あが子羽はぐくめ　天あめの鶴群たじむら」。（ここは、遣唐使船となる船の調達が難しければ、コンピューターグラフィックスを援用）。

呉小玲とは、清河の物語についてパソコンのメールでやりとりすることもあった。たとえばこんなふうだ。

ある夜帰宅するとメールが届いていた。

「今晚は。小玲です。お帰りなさい。お疲れなのにすみません。清河の出発の場面ですが、ただ清河の姿を追うばかりではなく、当時の社会背景も組み入れられればと思いつ

きました。たとえば、当時の平城京の民衆の姿を描くことができれば。何かよいアイデアはありませんか。次の研究会までにお考えください。嬉しかったです。では」

ぼくは書棚から歴史書など引っ張り出してめくり、しばらく考えた。そしてメールを返した。

「川村です。今晚は。」

民衆の姿も描くという考えは、ぼくも賛成。少し考えました。東大寺の大仏建立はどうだろう。ちょうどそのころ、盧舎那仏の開眼会が迫っていた。

清河が発案したのは三月。開眼会があったのが四月。その準備のため、たくさんの方々が徴用されていました。あの大仏の建立は当時の国家的事業で、その開眼会は国家の一大デモンストレーションでした。そのためにたくさんの方々が駆り出され、つらい労働を強いられました。それを描く。どうですか？再見」

その夜のうちに返信が届いた。

「今晚は。お返事ありがとうございます。大仏建立に駆り出された民衆を描くのはよい考えです。清河たちと、よい対照になります。できれば、もっと具体的に教えてください」

ぼくの返信。

「思いつきで書きますよ。たとえば、都大路を遣唐使一行が馬でさっそうと進んでゆかたわらを、ぼろをまとった男たちが役人に追い立てられながら材木を運んでいく。一人の男をクローズアップしてもいい。汚れた素足。痩せた身体。額の汗。歯をくいしばる。カメラを引いて、またその男の全身、もっと引いて行列、延々と続く、なんていうのはどうかな。」

道端や溝に行き倒れている人間を写してもいい。当時の都には、地方から公務でやって来た男たちが、食べ物も帰る費用もなく、たくさん行き倒れてもいたようです。

次回までに、適当な資料を探しておきます。お元気で」

次の日の夜。

「今日は。小玲です。大仏建立に駆り出された民衆。道端の行き倒れ。彼らは権力の犠牲者ですね。よいことを教えてもらったわ。今度あの大仏さんを見る時は、少し違って見えるでしょう。ぜひ、脚本の中に入れましょう。次回までに、私の方でもイメージしてみてください。いろいろありがとう。これを見るのは夜でしょう？お休みなさい」

次の「研究会」の時、呉小玲はそのシーンを早速パソコンで打ち、プリントアウトしてきていた。ぼくのために日本語で打ってくれているが、ところどころ中国語の簡体字でメモも書き込まれている。ぼくはそれを読み、意見や感想を述べた。それをまた彼女が書き込む。

船は順調に航行し、無事唐土に着く。

到着地は、他の遣唐使の例を参考にして、長江をさかのぼった揚州あたりとする。知らせを受けた土地の役人たちが、早速検問にやって来る。通訳を交えて彼らに対する清河。はるばる日本からやって来た使だとわかると、役人たちはかしこまる。(外国使は丁重に扱うべしと皇帝から厳命されているから)

やがて彼らは役人に引率されて揚州の市街地に入り、大都督府(揚州をはじめ淮南道諸州を管轄する大きな役所)に案内される。立派な客間。清河はその長官である節度使に迎えられ、ねぎらわれる。陪席している副使の同伴古麻呂と吉備真備はものおじせず、かつて習い覚えた中国語で節度使と談笑したりする。とくに吉備真備は在唐十八年の経験あり、中国語はいたって流暢。

一行は役所の近くに提供された宿舎にひとまず落ち着く。

大都督府が日本使の到着を長安に知らせ、その使が皇帝の指令をもって揚州に戻ってくるまでには数十日を要する。その間、一行は接待役の役人に案内されて街の見物に出たり、宴に招かれたりする。

長江と大運河が交わる揚州は、当時殷賑をきわめた商都。港には東南アジアのほか、遠くペルシャやアラビアの船も出入りし、内外人の商館がおびただしく立ち並び、夜ともなれば帯なす紅灯のちまたに人が繰り出す。また詩にも歌われた、江にかかる月の美しき、風流。すべて繁華で優雅で規模が大きく、とても日本の難波津の比ではなかった。もの珍しさに、昼夜歩き疲れ遊び疲れながら、清河はまず大唐に度肝を抜かれている。(そのカットを二、三)。

ようやく皇帝の使が到着し、一行は揚州に名残を残しながら、再び旅したくをする。しかし、長安入城が許されたのはほんの数十人で、あとは揚州に残って帰国の準備をしながら大使らの帰りを待つことになる。

清河らは役人に引率され、兵士に護衛されながら、まず船で大運河を北上する。隋の煬帝が造った大運河は、物資を南北に搬送する船のさかんな行き交い、またその両側に広がる果てしない風景。田圃や畑、牛馬、村、川。ようやく水路が尽きると、今度は馬や車の旅に変わる。ほこりっぽい道、急峻な山、山上の寺院、城壁で囲われた都市。この国はいつたいたいどこまで広く、どれほどの人間をかかえこんでいるのかと呆れながら、二カ月余りの旅、また旅。そのうちに風が冷え、枯れ草が目立つようになる。季節はすでに夏から晩秋へと変わっている。

洛陽城に宿り、函谷関を越え、そしていよいよ長安城へ。

長安城の東門、春明門に近い長樂駅。駅舎に向かってゆっくり馬を進めてゆく、さすがに旅やつれた一行。駅舎の前には、すでに接客使たちが待ちかまえ、清河ら日本使

にうやうやしく拝礼する。

と、その迎えの人々の中から立派な身なりの初老の男が飛び出してきて、日本語で声を張り上げ挨拶をする。感あまつて流す涙が白髯の上にこぼれている。唐名朝衡、時に在唐三十六年にも及び、中国人と何ら見分けがつかなくなっている阿倍仲麻呂だった。吉備真備がすぐ下馬して駆け寄る。手を握り、抱き合う二人。彼らは三十六年前、ともに留学生として希望に燃えて唐土に渡り、若き日を苦楽を共にしながら研鑽し合った仲だった。十八年ぶりの再会なのだった。次に仲麻呂は大使清河に近づき、しっかりと握手する。清河の顔にも、すでに唐朝で重きをなしている年長の仲麻呂への信頼と敬愛が浮かんでいる。

彼らは駅舎の中に招き入れられ、勅使から皇帝のねぎらいの言葉を伝えられる。旅装を解く暇もなく酒肴が供され、やがてさかんな宴になる。礼節ある中にも、親愛の情を隠さない接客使たちと日本使たちとの間で、会話がはずみ、筆談が始まり、哄笑が起る。

勅使は大使副使用の馬車と人数分の馬を用意してきていた。翌日、それらに乗り換え、ていよいよ春明門をくぐると、道幅百二十メートルもある第五街がまっすぐ西へと延びている。街路に槐や柳がすでに裸形を、隊列のようにどこまでも並べている。右手はすでにものものしく囲われた広大な離宮、興慶宮だ。馬を進めてゆくと、やがて左手に、さかんな東市のにぎわいを見る。道行く人々の活気、店舗や人種の多彩、威容を競う仏寺や道観の数々。飾り立てた馬車の窓からそれらをのぞき見る若き清河は、つとめて平静をよそおおうとするものの、この都市の壮大、また底知れなさに驚き、気後れをおぼえるのは隠しようがない。(この、周囲を城壁で囲った、東西十キロ近く、南北八キロ余りという城内は、どこまで深くあるのか、また、およそ人間の作ったもので欠けているものがここにはあるのだろうか……)。

皇城に近い迎賓館に旅の荷を解く。

数日後、皇帝のふだんの居所である大明宮の宣政殿で、清河らが玄宗皇帝に初めて拝謁を許される場面。清河は緊張の面持ちで天皇からの国書を奉呈し、それから低頭して皇帝の恙ないことを賀す。阿倍仲麻呂がその言葉を訳して伝える。

この、繁榮する大唐帝国に強権をもって君臨する皇帝の、近年までの善政は日本にも聞こえている。しかしすでに六十八歳。十年ほど前からは楊氏という一人の美女に狂い、政治を忘れている、という噂を清河らは道々で聞いていた。

けれどもその日、阿倍仲麻呂のとりなしよろしく、皇帝は初めから上機嫌だ。国書の内容や、絹、生糸、綿、水晶、瑪瑙などの進物にも満足した。彼は、大理石を敷き詰め、華美を尽くした殿中の玉座にいて、はるばる東方の海島国からやって来た使の面々を余

裕をもって見下ろす。そして、大使らの容儀が立派だと感嘆する（清河の姿は当然アツプで写す）。たぶん、ここでも大使らの服装や挙措動作には阿倍仲麻呂の周到なアドバイザーが生きていただろう。老いても感じやすい皇帝は、

「この使臣らを見ると、他と異なっている。以後、日本を有義礼儀の君子国と称することにする」と、型どおりではあるが最大級の賛辞を發する。清河らは、まず無事に一つの大任を果たしたことにほっとする。（この場面の撮影は、現在の西安では無理だから、北京の紫禁城の一面で行うことになるうか）。

次は、正月元旦の拝賀の場面。

史書には有名なエピソードが書かれている。大明宮含元殿。その贅を尽くした壮大な広間に、唐朝の百官とともに諸蕃からの使が居並んでいる。ところがその席次を見ると、日本は西側の第二席、隣国新羅は東側の第一席。日本使は不興だった。中でも古武士然とした副使大伴古麻呂が、接待役の呉懷実將軍に色をなして抗議した。「新羅は昔からずっとわが日本に朝貢している国だ。その新羅よりなぜ日本は下なのか。まったく納得がいかぬ!」。將軍は困って、新羅使に相談し、席を代わってもらった、というのである。

しかしこのエピソードは、清河を中心に描くこの脚本には不要かもしれない。

長安滞在中、清河らにはまた、新しく連れてきた留学生や留学僧の適切な配置、以前の留学生や留学僧の引き取りの折衝、さらに日本に舶載してゆくべき書籍や物品の購入など数々の任務があった。しかしそれらのことも、仲麻呂らに留邦人の手を借りてスムーズに進められた。

それらの公務の合間、一行はむろん長安観光も楽しむ。

そのころの長安の春の楽しみといえば、諸書にもあるようにやはり「元宵觀燈」に尽きようか。道教の祭で、正月十五日前後の三日間、城中のあらゆる街区におびただしい数の燈籠がかけられ、花のような燈樹が高々と並び立ち、街を真昼のようにする。そこへ子供も大人もみな繰り出し、雑踏をつくり、夜通し歌舞に酔いしれるのだ。とくに化粧をして着飾った女たちのあでやかさ、歌声、香水や脂粉の匂い。その異世界のような明るさと熱狂の中に、清河らも我を忘れて身を投ずる……。

共同で一つの物語を作っていく作業の後には、快い疲れが残った。初めのうちはぼくが説明したり、アイデアを出したりすることが多かったが、そのうち呉小玲の方も清河やその時代についての知識を口にするようになった。彼女はぼくの渡した資料や本を丹念に読んできた。その理解力は、彼女の専門が日本語であることを差し引いても驚嘆に値した。そのうえ彼女は、ぼくなどが恥ずかしくなるくらいに努力家だった。厳格な家庭での、幼い時からの厳しい習練が想像できた。

一息入れた後、今度は一時間ほどぼくが中国語のレッスンを受ける。しかし、こちらは案の定、遅々として進まなかった。もちろんその原因はもっぱらぼくの側にある。ぼくは仕事の忙しさや疲れを言いわけにしながら、不まじめで能力も乏しい生徒だった。でもいうまでもなく、時に教師の表情を見せる呉小玲から少しづつ習うのは楽しかったし、おかげで中国語の音楽的な美しさがわかり、好きにもなった。その語学学習への動機づけの効果をいうなら、学生時代の第二外国語の授業の比ではない。呉小玲の発音する北京官話は美しく、明晰だった。彼女は、「歌を聴きましょう」と、上海から持ってきたCDをかけてくれることもあった。幼いころから長く古箏を習っていたというだけあって、音楽にも詳しくかった。

秋から冬へ、日はしだいに短くなり、中国語のレッスンは終わるころには外は暗くなっていた。ぼくはいつも呉小玲を駅まで送った。そのまますすぐ帰ってゆくこともあったが、駅の近くの商店街で夕食をいっしょにすることもあった。

そうして休日の半日をいっしょに過ごすのだから、ぼくたちは恋人どうしのようでもあった。しかしもちろん二人の意識はそうではなかった。ぼくたちは清河の物語を作るという共同作業のパートナーとして、清河の物語のフィールドでいっしょに遊んでいたのだ。その遊びはいくらか知的で、いくらか高尚だと思えた。そしてそこでこそ、ぼくは呉小玲という一人の女性を深く知った。彼女のものの見方や微妙な感情の動きを知り、味わった。また彼女をそうして育てた異国の風土や社会のにおいを嗅ぎ、実感した。そうした二人の関係は、ぼくには新鮮で自由で快適だった。そしてそうした関係を持続するためには、ややこしい恋愛感情や肉欲などの介在は、努めて避けられるべきだった。

呉小玲の話の中に、彼女が清河に、あるいはその娘の喜娘に、自分を重ねているところがあることにぼくは初めから気づいていた。それは自然なことであつただろう。呉小玲も故国をもち、故国から離れて異国に暮らしていたのだ。しかもどちらも日本と中国だ。だからぼくは呉小玲に、「あなたなら、このときはどう感じるか、考えるか」といった質問をよくしてみた。千二百五十年ほど前は隔たつていても、異国に暮らす体験や心情には共通するものがあるにちがいない。それを聴いてみたかったからだ。

ぼくの興味の中心は、彼らをめぐる事件や運命よりも、ついに帰国しなかった清河や、清河の死後あえて父の故国に渡ってきた喜娘の心のドラマにあった。脚本としても、そこがはつきりしないと描きようがない。そしてその点では呉小玲も同じ考えだった。

ある時、その点で二人の間で展開があつた。ぼくの、「清河はいつのころから帰国の意志を失ったのだ」という考えに、呉小玲はまず賛成してくれた。でもその理由は少し違うといった。

「あなたの、清河が世界の都、長安で個人に目覚めた、という説は大変おもしろい。で

も、こうも考えられない？私の考えはもっと単純なの。清河は長安での生活が長くなるうちに、誰かと恋をしたの。そして生まれたのが、喜娘。清河は二人を心から愛した。それで帰りたいなくなったの。清河には、日本に妻子がいたのでしょう？だから清河は望郷の思いにも悩んだの。でも結局は長安で生きる道を選んだ。こんな私の考えはどうですか？」

清河が長安で恋に落ちた！考えもしなかったことなので、ぼくは驚かされた。その考えは、ぼくの説の弱点をぐさりと突いていたかもしれない。個人主義に目覚めた清河、というぼくの考えは、情況を読み、個人の立場に立ったつもりでも、いかにも観念的だった。それに比べると呉小玲の考えは、一人の人間の生を現実的にとらえているようだった。それに、喜娘がなぜ日本にやって来たかという説明も、なんだかしやすい。

けれども、その考えには現代的すぎるにおいもあった。「万葉集」にいかに歌で、「恋のために死にそうだ」とか、「あなたは私の命、あなたなしでは生きられない」とか、現代の歌謡にも通じるようなことを歌っていても、八世紀の日本人でそんな恋愛至上主義に走る男がいたのだろうか。いたとしても、それが清河なのだろうか。

ぼくはその疑問を口にした。呉小玲は、

「うーん、考えてみましょう」と引き取った。

ともかくぼくは、その時から長安における清河の恋愛を考えてみなければならなくなった。もちろん呉小玲といっしょに。そして彼女は、そこにこそ清河と自分を重ねていたことが後になってわかった。

遣唐使の一行は、恵まれた待遇を受けながら春、夏を長安で過ごし、七五三年の六月ごろ帰国の途につく。玄宗皇帝が一行との別れを惜しんで、送別の宴席を設け、御製の詩を賜ったのも異例のことだった。

長安城外での送別のシーン。送られる側に、喜びの色を隠せない阿倍仲麻呂の姿も見える。仲麻呂は以前に一度帰国の願いを却下されたことがあるが、幸いこのたびは許されたのだった。

一行は去年不安をいだきながら上ってきた同じ道を、今度は意気揚々と下っていく。気骨の折れた長安での大任は、まずはつつがなく果たせた。また大唐の都の栄えをこの目で見、味わってきたという満足感がある。書籍、仏像仏具、さまざまの調度、珍宝など、奈良の都へもたらすべき物品の購入も、滞りなく済ませた。あとは無事な帰国を計るばかりだ。揚州に残した人々が、もう出帆の準備を整えて、首を長くして待っているはずだ。

だが一行には、揚州での大仕事はまだ残っていた。そのころ、「江淮二河の間でただ一

人の化主」と讃えられていた具戒の僧、鑑真大和尚の日本への招請、そのことである。十月十五日。揚州、延光寺の堂内。

日本使たちが深々と頭を下げ、鑑真を礼拝している。顔を上げたのは、上座から順に清河、古麻呂、真備、朝衡の面々。大使清河がやや緊張した面持ちで、しかし落ち着いた口調で語り出す（日本語で）。

「本日はようやくご拝顔の榮を得、私どもは今、無上の歡喜にとりつつまれております」それを朝衡が中国語に翻訳して伝える。瘦身だが骨格は頑丈そうな鑑真が、心なしか頭を前にかしげる。そばには、長年鑑真と苦樂をともにしてきた高弟数人も控えている。

「大和尚様が、わが日本国の招請に応じてくださり、日本国に渡って仏法の真の戒律を伝えんというご宿願をお持ちであることを、私どもはかねてよりよく存じております。それはわが日本国にとりまして、この上なくありがたいことであります。

しかしながらまた、大和尚様が今まで五たびも渡海を試みられながら、無念にもまだご宿願を果たされないことも承知しております」

聴き入る僧衣の鑑真。今年もう六十六歳になる。渡海行の辛苦のために光を失った両眼は静かに伏せられている。顔面に緊張はなく、やや微笑しているように見える。

「このたび、私どもは長安にて、大和尚様や御弟子五人のお名前を録し、伝戒の師としてあらためて日本にお招きしたい旨、皇帝に奏上いたしました。ところが、近ごろ道教に凝っておられる皇帝はそれを認められず、代わりに道士を連れてゆくようお命じになりました。私どもはまだ日本国では道士が崇められない事情をご説明し、それでも皇帝のご意向に沿って四人の者を道士の法を学ばせるために都に留め置くことにいたしました」

清河は、自分たちが今こうして鑑真の招請に來ていることが皇帝の意志に反することであることを包み隠さず述べる。ということは、もし鑑真が渡海を敢行するなら国禁を侵すことになり、見つければ危うい、準備も渡航も秘密裏に進めねばならないということだった。

高弟たちの間にもさすがに動揺が走る。しかし大和尚の顔つきにはいささかの変化もない。清河が言葉を継ぐ。

「このうえは、大和尚様のご決断にすぎるよりほかございません。私どもはすでに揚州の港に船を四隻用意し、出帆の準備もほぼ整えております。このたびこそは、つつがなく日本にお渡りになれましょう。どうか、まげてご同行をご決意くださりますよう」

朝衡が翻訳し終わったあと、深い沈黙が流れる。清河たちの顔には不安の色がさす。外は初冬の景色、雲がたれこめ、時おり寒風が舞い、さかんに木の葉を散らしている。

と、和尚の口が静かに開く。

「知道了。^{チイクオラ}我去^{ウオチー}（わかりました。まいりましょう）」

日本使一同の顔に歓喜が走る。涙を浮かべる者さえいる。過去十二年にわたって命がけの渡海を試み、数々の苦難を耐え忍びながら、和尚の日本へ伝戒するという初心がいささかも揺らいでいないことに感じたからだ。一同は再び、鑑真を深く礼拝する。

早速十月十九日、日本使と鑑真一行は人目を避けるようにして乗船して蘇州に下る。和尚が二十四人の弟子たちや日本にもたらすべき仏舍利、仏像、仏書などの貴重な荷とともにまさに揚州の江岸を立ち去ろうとする時、和尚を慕う二十数人の沙弥たちが走り出て追いつき、今生の別れを泣きながら悲しみ、そして最後の結縁を請う。和尚はそれに応え、その場で手を伸べて一人一人の頭を撫で、戒を授ける。そのようすを見ていた清河たちは、あらためて和尚の高徳と人となりに感服する。

蘇州の港で最後の出港準備を進める間に、街に鑑真出国のうわさが静かに広まった。それを聞いて、若き大使清河の頭に、一旦は封じ込めたはずの逡巡がきざす。自分たちは今、皇帝の禁を侵そうとしている。今ここで、また船の漂い着いた先で、郡役人の検分を受けるようなことがあったら、必ず鑑真一行も自分たちも捕縛され、何らかに処分されることになる。すぐの帰朝はかなわず、自分たちに課せられた二つの使命の二つともが果たせなくなる。その不安はふくらみ、清河は主だった人々を集めてあらためて相談する。意見は二つに割れた。清河は悩む。一喝されるかと恐れつつ、鑑真本人にも相談してみる。鑑真は静かに聴いた後、表情も変えず、「大使のお考えに従います」とだけ答えた。一月前、延光寺で初めてまみえて以来、清河はすっかり鑑真のたたずまいや人となりに心服している。たしかにこれほど修行の深い高德の僧侶は日本にはいない、と思える。それだけに清河は迷いに迷う。そしてついに、泣いて和尚に詫びつつ、船から下りてもらう。

十一月十六日、四隻は蘇州の黄泗浦を出帆、河口を過ぎて大海に出る。強い季節風が吹き、船の進みは速かったがだいぶ南方へ流されてしまう。

六昼夜を過ぎた後、龍のように横たわる島かげを見る。沖縄島だった。しかし、ここではもう第四船の姿がない。また、北西から吹きつける季節風はなかなかやまなかった。三船はひとまず島かげに隠れ、風待ちをする。水や食料の補給のために小船で上陸もしてみるが、緑濃い森の中や美しい海浜に貧しげな部落が少しあるばかりで、言葉もほぼ通じかねた。

その間に、何ごとか、第二船の副使大伴古麻呂が緊張した面持ちで大使の船を訪れる。そして床に低頭しつつ、「実は、わが独断で、わが船に大和尚様^ご一行を乗せております」と告げる。出港前、大使に内緒で、夜陰に紛れて和尚たちを自分の船に導き入れたのだという。古麻呂はさらに、よく通る太い声を震わせて、「大使の命に背いた自分は、この

場で斬られて当然。その覚悟でやってまいりました」と言う。武人らしい古麻呂のふるまいだった。清河は驚いたが、すぐ古麻呂に近寄り、助け起こす。出港して唐国の海を離れて以来、自分の弱気のためにかけがえのない宝を積み残してきたような後悔が募っていた。それでいまだ鑑真とともにあると知り、清河には夢のような喜びだ。かえって古麻呂に感謝する。早速わざわざ小船で第二船に出かけて和尚一行を見舞い、あらためて深く詫げる。いつに変わらぬ温顔の老和尚は、両手を伸べて清河の手をいとおしうに包んで撫でる。それは意外に温かい手だった。

十二月六日、ようやく南風起こり再出帆しようとした時、清河の第一船は島を取り巻くリーフに座礁してしまふ。他船はそれに気づき、沖に錨を下ろそうとする。清河は果敢にただちに小船を出してそれらの船に指令を与える。

「無傷の第二船と第三船は、ともに種子たねの島を目指せ。わが第一船は修理を終え次第、後を追う」

離れゆく船を船上から見送る清河。行く船にも留まる船にも、声を挙げ、袖を振り合う人々。第二船の甲板には、こちらを向いて合掌、読経している鑑真らの姿もある。むろん両者とも、それが永遠の別れになるとは知らない。

船をリーフから引き離し、船底を修理するのに数日。再出帆。ところが逆風吹き狂い、船はどんどん南方へ流される。

見も知らぬ大海を二千キロも漂流し、ようやくたどり着いたのは熱砂の浜、木々の錯雑するジャングル。暦の上では冬のさなかであるにもかかわらず、真夏の異境に迷い込んだよう。

夜、飢え疲れた彼らを奇声を挙げて土地の人々が襲撃する。闇の中を逃げ惑う日本人たち。ほとんどは捕まったり殺されたりする。それでも清河、仲麻呂ら十数人は九死に一生を得てかろうじて逃れ、唐国の出先の役所にたどり着き、救いを求める。その時彼らは、そこがさしもの唐朝の威光もかかげる驩州かんしゅう（ベトナム北部）であることを初めて知る。

十二月の二週目の休日の朝、呉小玲から今日には行けないと電話があった。そんなことは初めてだった。謝りをいう呉小玲の声がつからそうだった。ぼくは、

「わかった、何でもない。気にすることはないよ」と慰めた。軽い落胆はあったが、誰にだって急用ができることはある。

「で、次はいつにしよう。来週の日曜でも？」
少し沈黙があった。ぼくは不安になった。

「わからない。もう行けないかもしれない。……でもまた、必ず連絡します。待ってい

てください。いつか必ずします。ごめんなさい、ほんとうに」声は消え入りそうだった。「そう……」ぼくは継ぐべき言葉も見つからなかった。自分は彼女の友人の一人ではあってもそれ以上の関係ではないと思いついた。電話は切れた。

呉小玲に会えなくなったその休日の午後、ぼくの落胆は意外なほど大きかった。部屋に一人でいることに耐えられず、街に出た。商店街の店頭では、クリスマスと正月が猥雑に入り乱れていた。公園では人出も乏しく、寒そうに首を振る鹿の姿だけが目立った。

むやみに歩きまわりながら、ぼくは自分の気持ちを分析してみる必要を感じた。自分は、二人でここまで作ってきた清河の物語が未完に終わるかもしれないことがつかりしているのだろうか。そうではなかった。まして中国語の学習の進みぐあいなど、どうでもよかった。わかったことは、今や清河の物語も中国語も、ぼくにとっては呉小玲と切り離せなくなっているということだった。

その夜、ぼくは携帯電話で短いメールを一つ送った。

「小玲さん、今晩は。君のことを心配しています。会って、話したい。返事ください」しかし、その夜も翌朝も返事はなかった。

入社しても、何か変だった。気分はひどく落ちこみ、何を見ても興味がわかなかった。電車の中の旅行会社の吊り広告を眺めて、どこか人の少ない、世界の果てのような所に一人旅をしたいと淡く考えたりした。つまり、症状は失恋の場合に似ていた。でもぼくはまだ、それを認めてしまうことにこだわっていた。自分は彼女とそんなふうにつき合ってきたのではない。二人は、互いの心も身体も貪り合うような恋愛なんかとはちがう、もつと精神的な、特別な関係だと思いついた。

帰宅するとパソコンに返事が届いていた。

「小玲です。川村さん、心配をかけてごめんなさい。でも、今はわがままを言わせてください。私、今少し大変です。」

いつかまた、必ず連絡します。気持ちの整理がいたら、会ってお話しします。それまで、待ってください。それまで、さようなら。

あなたのこと、とても大切に思っています」

その週の何日目かに、課の忘年会があった。ぼくは欠席したかったが、それもしいくい事情があり、また久しぶりに痛飲してみるのも悪くないかと思いついた。その夜は新入社員のころのように、かなりのペースで飲んだ。二次会に出たころには、あたりの空気が白い粉を吹いているように感じられた。酔うごとに、同僚の話は耳から遠ざかり、呉小玲の顔や言葉つきだけがクローズアップされてきた。彼女は手の届かない遠くにいるのではない、この同じ都市にいるのだった。電話をするためにふらつきながら席を立った。

たぶんそれから三十分も経たないうちに、ぼくは待ち合わせの場所に立ち尽くしていたし、さらに三十分後には、呉小玲とカフェバーで並んで座り、グラスを傾けていた。店はそう混み合ってもいなかったし、音楽も低めに抑えられていたので、ぼくたちは話のために声を張り上げなくてもよかった。

「逢いたかった。もう逢えないかと思って、寂しかった。逢えてよかった」

酔いのせいでぼくは饒舌に、しかも素直になっていた。ふだんなら言えないような言葉がすらすらと出た。頭の片隅で、呉小玲は酔っぱらったぼくを迷惑がり、嫌うのではないかと恐れていたが、しかし彼女はいやな顔を見せなかった。それどころか、ぼくにしきりに詫び、また涙を見せるのだった。彼女も、酒ではないが、何かに酔っていたのかもしれない。赤っぽい光の下に白い横顔を浮かべながら、やがて呉小玲はこんなことを言った。

「私、あなたに一つ、嘘をついていました。上海のテレビ局に兄がいると言ったけど、ほんとうは兄ではないの。恋人なの」

彼女の心を推し量るために、ぼくはその言葉を頭の中で二、三度ぐるぐる回してみなければならなかった。なおそのうえで、「どうして？」と愚問を発してしまったように思う。呉小玲はため息をついた。

「ごめんなさい。言いそびれたの。なぜか」

「で、君はその人と結婚するつもり？」

「少し、複雑です。……日本では、少し昔の言葉でいいなづけ、というでしょう。私たちはそれなんです。親どうしが決めた仲なの。だから、私たち、お互いに子供の時から知ってる。私が留学を終えて帰ったら結婚するという約束で、彼は私を待っていてくれるのです。でも私の留学は思ったより長引いてしまいました。今も中国に帰るべきかどうか、悩んでいるのです。まるで、清河のようでしょう？」

「君はその人が好きなの？」

「ええ。深刺としていて、仕事もできる人……男性として魅力のある人」

「そんなに長く離れていて、今でも？」

「ええ。でも……」と呉小玲は少しいいよんだ。その視線がしばらく、カウンターの向こうに泳いだ。

「私、日本で恋愛しました。相手は、あなたにもいつか言った、大学院生のときの指導教官です。でも、誤解しないでください。教授が悪いのではないのです。このごろよく新聞に出ているような、セクハラではないのです。私たち、自然に引きつけ合ったのです。」

彼は初めはとてもやさしかった。でも私たち、あまり親密になりすぎて、途中からち

がってきた。彼は私の前で、ありのままの自分をさらけ出す。自分の良いところも悪いところも。それが彼の生き方。すると私の方もそうするしかないのです。

二人、仲のいいときはとてもいい。世界中で一番いいと思える。でも、彼には奥さんも子供もいて、私にも中国に彼がいる。どうにもならないけれど、いつもそのことでこじれてしまう。いったんこじれると大変。嫉妬、憎しみ、狂気、はては暴力まで。自殺も考えました。傷つけ合い、次にはそれをなめ合う。私たち、そんなことを繰り返してきたのです。このごろでは、逢うと喧嘩ばかり。

でも別れようとしても、別れられない。どうしていいか、わからない。つらいのです。……こんなこと、今まで、誰にも言わなかったわ」と言って、呉小玲は涙を落とした。

ぼくは何も言えなかった。そばに彼女の呼吸や身体を感じながらでは、その告白は生々しすぎた。この、ぼくと同じくらいの年齢の、魅力的な中国女性には、故国に恋人がいて、留学先の日本でも激しい恋に落ち、そのはぎまで苦悩している、それを知っただけで十分だという気がした。その複雑な感情のもつれの中に自分は立ち入れないし、立ち入ってもしかなかったがなと思えた。

また、その時もう一つわかったことがある。それは、彼女にとって清河の物語はいわば他人ごとなのではない、彼女は清河の物語のある部分を自分の物語として生きようとしているということだった。長い沈黙の後、ぼくは言った。

「たしかに、君は清河のようだ。清河も異国で恋に落ちた。……脚本はそうしよう。決まった。それがいい」

「そして、清河は結局帰らなかった。帰らない方を選んだ。……でも、まだ『研究会』は続けられるの？私、あなたにひどい嘘をついていたのに」

「当然タンジャン（もちろん）。脚本の送り先が誰であつてもぼくはかまわない。そんなことはどうでもいい。ぼくは物語を君と二人で作る、それが楽しいんだ。完成させようよ。もし君がまだ清河の物語に興味を持っているなら」

「当然タンジャン啊。作りたい。完成させたい。そうすることで、私、元気が出せるかもしれない。ありがとう。あなたには感謝の気持ちでいっぱいです。ではまた、行けるようになったら、連絡するわ」

「待ってるよ」

バーを出て、呉小玲を駅まで送って、それで別れるはずだった。ところが三十分後、ぼくたちはホテルのベッドにいた。ぼくの誘い方は少し強引だったかもしれない。でもその時のぼくには、彼女とそのまま別れてしまうベクトルが心にも身体にも不足していた。

呉小玲の白い裸身に触れた時、ぼくはほんとうにこうしたのかどうか自分を疑

った。これは恋愛なんかではない、もっと特別な関係を二人は作っていたはずだったと相変わず思ったりした。彼女の方はどうだったのだろう。彼女の口数は少なかった。でも表情はやわらいでいた。アルコールと話に酔酩したぼくをいたわるようなそぶりがあつた。

こんな彼女の言葉だけを覚えている。

「あなたは、いい人。それは初めて会った時に、もうわかったの」

ぼくは秋の初めの、最初の出会いの場面を思い浮かべた。魂の叫びのような風の声の感じがよみがえってきた。また彼女が、灯りを消した中で仰向いて、

「あなたのおかげで、あの人と別れられるかもしれない」とつぶやいたこともかろうじて記憶にある。

しかしそのように二人だけで親しく夜の時間をつむいでも、朝の光は容赦がなかった。翌朝ホテルを出てから、ぼくたちは互いに、何かに耐えているように無口になってしまった。まるでそうした経験の乏しい、十代の男女のように。ぼくは、呉小玲を今までよりも深く知った一方で、何か大事なものを失ったような気がしていた。

そのまま連絡もなく年が暮れ、新年が明けた。「作りたい。完成させたい」とあの夜呉小玲は言ったけれど、別れた時の感じからは、もう彼女から連絡はないかもしれないとぼくには思えていた。また彼女の激しい恋愛を知ってしまった以上、ぼくの方から連絡するのもためらわれた。

しかし松の内が過ぎたころ、呉小玲の方から電話があり、明るい声で今度の「研究会」の日取りを相談してきた。ぼくは救われたような気になり、自然に声はずんだ。

約束の日、呉小玲は手作りだという水ギョーザを手土産にやってきた。ぼくたちは久しぶりに会った旧友のように笑い合い、冗談を言い合った。そしてまた机を囲み、資料を広げて清河の物語をつむぐ作業に熱中した。年が改まったせいもあつただろうか、ぼくたちはどちらからも以前のことにはふれなかった。

春三月ころ、命ながら長安に舞い戻った清河。玄宗皇帝は清河や仲麻呂の帰還を喜び、しばらくの休息を許した後、再びの朝廷への出仕を命じる。多くを失った旅の苦難に同情してか、特に鑑真の出国を咎められることもなかった。

清河におだやかな日々が戻ってくる。沖縄で別れた遣唐船二隻が、無事日本に到着したかどうかはむろん大きな気がかりだったが、すぐに長安にたしかな知らせが届くことはまず期待できない。渤海や新羅経由で情報がもたらされる可能性はあるが、それも数年先のことだろう。日本から次の遣唐使がやって来るのは早くても十年後、いや二十年も先のことになるかもしれない。

清河は、長安での暮しが長引くことに腹をくくらざるを得ない。そして彼個人には、それは苦痛ではなく、むしろ解放感さえもたらした。今や、国家の面目を一身に負う遣唐大使の重荷からもいちおう免れていた。数カ月前、名残を惜しんで永久の別れを告げた長安の人々、風物、街並みは、再会するとすべてがなつかしく、彼は心軽やかに急速にそれらに溶けこんでいく。

そうした彼の暮しぶりを、数カットで描く。皇城の東側の邸宅街、その一隅に与えられた屋敷から、早朝、馬車で出勤する場面、朝廷で仕事に精を出し、同僚と談笑する場面、にぎわう街路や市を馬車で行く場面など。

朝廷から下がった午後は、多く読書や交友に時を過ごす。この「交友」というのは、そのころの日本には未発達で、清河には新鮮だった。日本での同性どうしの人間関係は、おおよそ血縁の範囲に限られていた。ところがこの国では、血縁もさることながら、個人の人格や才能によって男どうしが身分を超えた友情を結ぶのだった。

現に阿倍仲麻呂の場合。二十歳から在唐し、有能な官吏でしかも詩文の才能も豊かだった彼は、貴顕の間に知己多く、また王維、李白ら当時を代表する詩人たちとも親しく交わっていた。李白は仲麻呂帰国の際は送別の詩を贈り、そしてその船が東海に沈んだという知らせが届くと、仲麻呂を明月にたとえ、「明月帰らず、碧海に沈む」と痛切な詩を作って悲しんだほどだ。

場面は、長安の右京の繁華な西市に近いとある酒楼。店内はほの暗い。酒席には阿倍仲麻呂、李白ほかの詩人、そして清河ら数人がくつろいで座っている。狭い舞台では、華麗な衣装をまとったペルシヤの女が舞っている。そばで楽人が奏でているのはペルシヤの楽器。テーブルの上の色ガラスのコップに入っている酒も西域伝来のワイン。

男たちのそばには胡姫、つまりペルシヤの歌姫たちがはべっている。男たちはうつつむいたり、宙をにらんだり、何かぶつぶつと口ごもったりしている。即興で詩作する競争をしているのだ。思いつくと紙に筆を走らせている。

誰かが、できた、とばかり、自作の朗詠を始める。胡姫への恋情をつづった戯れの詩で、読み終わるとどっと歓声や笑いのはじける。「乾杯！乾杯！」と口々にいい合って杯をあおる。まるで彼らはすっかり世俗を忘れ、時も空間も超越した仙境に遊んでいるようなふるまいだ。

清河はまだ、そうした遊びに馴れないところがある。会話の能力もまだ十分ではない。けれども、詩人たちの奔放なふるまいや西域の情緒が醸し出すその場のムードには十分酔いしれている。詩人たちとともに杯を重ね、高吟し、笑い合う。うるわしい胡姫の姿態のとりこになる。

続く場面では酒楼の一部屋で清河が一人の胡姫と向かい合っている。場所は月光の這

う露台でもよい。胡姫は顔の彫り深く、肉感的でまだ若い。中年の好男子、清河と釣り合うようにする。杯を傾け合う、やがて二人は寄り添って抱擁し合う……。

清河の恋愛の相手を、唐人ではなくペルシヤの歌姫にしようと提案したのは呉小玲だった。調べた文献で清河の唐での結婚にふれるものは、すべて唐人の女と結婚したと書いていた。たしかにその可能性は高いが、記録が残っているわけではない。二人で当時の唐の歴史や社会を調べていくうちに、当時国際都市長安には西域から多くの人種や文物が流れ込み、中でもペルシヤの風俗が流行したこと、また李白をはじめ詩人たちがさかんに市中の酒場に遊んだことがわかり、清河もそうした所で相手にめぐり逢ったかもしれない、と彼女が思いついたのだ。

当時の中国の結婚制度を説いた書物をめぐりながら、こんな会話もした。

「この本には、漢民族の間では伝統的に儒教の思想によつて、結婚は仲人を立てて親どうしが取り決めるのがふつうだったとあるわ。今も少し残ってる」

「なるほど。するとこゝも考えられるね。清河は唐朝から高官の待遇を与えられていた。少し齢をとり、外国人というハンデいはあったにしても、娘を清河に嫁がせたいという都の良家の親たちもあつただろう」

「そうね。でも、清河には日本に妻も子供もいたでしょう。それにまだこのころは、彼はいつかは日本に帰るといつもりだったのではないかしら。中国から正妻を連れ帰つたら、当時の日本でも問題ではなかった？」

「正妻が二人というのは、たぶんね」

「酒場で遊ぶうちに、ペルシヤの歌姫と恋に落ちる。正式に結婚したわけではない」

「なるほど。すると清河は、唐の文化にひたつただけではなく、彼女を通して遠くペルシヤの方まで思いを馳せていたのかな。歌姫の方は清河を通して東方の島国を見ていたことになる。おもしろいな。そして二人の間に女の子が生まれる。名前は喜娘きじょう」

「その喜娘という名前も、歌姫の娘らしくない？」

「わからないな。でもその想像はすごくおもしろい。使えるね」

というわけで、次には喜娘の身体つきや目の色が問題になった。

歳月は流れる。平和と繁栄を謳歌していた唐朝にも、大きな影がしのびよる。

七五五年冬、節度使安祿山が蜂起。北方から十万の大軍を率いて、たちまち洛陽まで攻めのぼり、攻略する。その後洛陽と長安の間で戦闘が続き、翌年六月、玄宗は楊貴妃、宰相楊国忠、家族らとともにわずかな近衛兵に守られながら長安を脱出する。しかし、都から少し西方に進んだ馬嵬の駅頭で、兵士や人民の間から勃然とわき起こる怨嗟の声、

怒号。「殺頭楊シヤトウヤン（楊を殺せ）！」。その中で楊国忠は斬殺され、楊貴妃もついに宦官の手によつて縊死させられる。失意の中で老皇帝は肅宗に譲位し、四十三年にも及んだその治世が終わつたのだった。

皇帝の消え失せた都では、逃げ惑う人々、貴族や富商たちがあわただしく逃げ出した後の邸宅に侵入する民衆。略奪、打ち壊し、放火。あの「元宵觀燈」に酔いしれたような雅びは、もうこの首都のどこにもない。

その大混乱の中に清河もいる。さしも巨大な帝国が一朝で崩壊しかけているその実相を、信じられないような面持ちで眺めている。それから彼は馬にまたがり、従者も連れず、西市の方へと走る。雑踏をかき分けて進み、やっと目指す胡姫の家にたどり着く。だがその家はすでに破壊され、胡姫の姿はない。

内紛で安祿山は殺され、反乱軍の勢力も弱まった翌年十二月、玄宗たちは避難していた遠方の蜀からようやく長安に戻ってくる。反乱は依然として各地でくすぶっているが、都にはようやく平和な日々が戻ってきた。

清河は胡姫と再会する。そして胡姫を自分の屋敷に引き取つて暮しはじめ。胡姫は妊娠した。

七五九年、清河四十二歳。この年日本からの久しぶりの遣唐使、高元度こうげんら十名ばかりが、苦難の旅の果て、長安に着く。彼らは渤海使の帰国に同道して日本海を渡り、さらに唐への渤海使に従つて陸を行き海を行き、ようやく内乱の唐土にたどり着いたのだった。

清河邸の客間。

高元度が椅子に座り、清河と向かい合っている。かたわらの椅子には、阿倍仲麻呂。もう六十二歳になる。高元度が来唐の事情と目的を告げる。それによれば、前年の九月に帰国した遣渤海使から清河が無事に長安に戻っていることが報告され、日本朝廷は色めき立った。藤原仲麻呂を中心として急いで協議がなされ、清河を迎える使節として自分を派遣した、というのだった。淳仁天皇の親書はすでに清河の手にある。また高元度は、清河や仲麻呂への家族や親族からの手紙も携えてきていた。

使の旨を告げた後、高元度は日本国内の情勢に話を移す。聖武太上天皇の崩御、そして四百人もが罪せられ、殺されたという橘奈良麻呂の変。その中にあの、先の遣唐副使、大伴古麻呂も名を連ねており、杖死させられたというのは、驚きでもありいたましくもあつた（ここで古麻呂の雄姿をオーバーラップ）。

また、鑑真大和尚のこと。その古麻呂に連れられて入京し、天皇以下国家を挙げての熱烈な歓迎を受けたこと、東大寺に戒壇を設け、貴賤を問わず帰依する人々が絶えないこと、それはあたかも芳しい春風のように仏法の尊い風が京中を薫らせ吹いたようであ

ったこと、さらに鑑真は右京にある新田部親王の故宅の跡を賜り、授戒のための寺を建立中であること（唐招提寺と鑑真を映す）。鑑真が無事日本に着いたかどうかについては不確かなうわさを聞いていたばかりだったので、それを聞いて清河や仲麻呂も大いに安堵をおぼえる。さらに高元度は、鑑真からの手紙を清河に手渡す。清河が押し頂いて拝すると、自分たちの渡日が成就したことへの感謝と、清河の帰朝を楽しみにしていることを簡潔につづってあった。清河はあの和尚の手の温もりをまた感じた。和尚の新しい寺がたまたま自邸のすぐ南に建立されることにも、ありがたい仏縁を思う。

二人の方からも矢継ぎ早に質問を発する。元度が答えるたびに、驚きの声やため息がもれる。話のはしばしから、現在の奈良の朝廷では清河の従兄の藤原仲麻呂が、唐国におけるかつての楊国忠のように専横をきわめているさまが推し量られた。また、その仲麻呂が誰よりも清河の帰国を心待ちにしている、今の唐の制度や国際情勢に通じた清河を片腕とも頼んでいると元度は語った（藤原仲麻呂の姿のオーバーラップ）。

そうして鼎談しているところへ、胡服をまとった美貌の若い婦人が笑顔で姿を見せる。婦人の腕には幼い女の子が抱かれている。愛くるしい女の子は清河の姿を認めるとむずかり、床に降ろされるとたよりない足取りで清河の方に進む。清河も顔をやわらげているとおしそうに抱き上げ、「妻と娘だ」とこともなげに紹介する。家族の平和な光景だった。かえってそのために、高元度はいぶかる。はたしてこの、名も唐風に河清かせいと改め、唐国の高級官僚然としている前遣唐大使に、帰国の意志はあるのかと。

高元度の不安はなかば的中した。彼は国書を持って日本からはるばるやって来たにもかかわらず、乱のためと称してなかなか皇帝への拝謁の機会を与えられなかった。久しく待たされた。そしてようやく下された勅命は、

「秘書監河清を、使の奏するによつて日本へ帰朝させようと思う。しかし今はまだ残賊多く、旅路は危険である。乱が収まれば、使を仕立てて河清を本国へ送り届けよう。よつて元度は南路をとり、先に帰国して復命すべし」というものだった。

これでは清河の帰国を許さないというのに等しかった。実際、阿倍仲麻呂からの内密の情報によれば、肅宗は近臣に、「河清はもう本国の貴族であり、朕のすこぶる鍾愛するところである。よつて、帰国は許さぬ」と漏らしたという。高元度は、長く待たされた上でのこの処置にはわりきれぬものを感じたが、しかし皇帝の勅命である以上如何ともしがたかった。

長安城外。高元度の出立の場面。たたずんで見送る清河や仲麻呂。清河は高元度に、天皇へ奏上のほか、家族、親族らにつづった長い手紙をいくつも託した。もうこれが最後の通信になるかもしれないという思いがあった。家族への手紙の中には、京の自宅のすぐ南に建つという鑑真和尚の新寺へ、十分な布施をするようにという言葉も入れた。

かたわらの数人の日本人の中に、不惑の齢になった羽栗翔はぐりのかけらの姿も見える。彼の父、羽栗吉麻呂は昔阿倍仲麻呂の従者として入唐し、唐人の女を娶って二人の男子をなした。自由に両国の間を行き交うようにとの願いを込めて、長男を翼たすく、次男を翔かけらと名づけた。七三四年、少年の彼らは父に連れられて帰国したが、このたびはまた翔は録事として高元度についてやって来た。仲麻呂にも再会し、そして前遣唐大使清河の帰国を助けるために長安に残ることになったのだ。

彼らは日本式に互いに袖を振り合う。それは別れを惜しみ、また袖の呪力に託して相手の無事を祈るゆかしい所作だ。だが、去ってゆく高元度の表情はさえない。

二月の初めの「研究会」が終わったあと、呉小玲が、

「私、帰国することに決めました」と告げた。表情には明るさがあった。

「そう。いつ？」ぼくは急にけだるさをおぼえながら訊いた。少しきつすぎる部屋の暖房にあてられたせいもあったかもしれない。

「来月になると思うわ。あなたには何も言わなくてごめんなさい。でも私……教授とやっと別れました。今はすっきりした気持ちです。あなたのおかげだと思っています」

「ぼくの？」

「ええ。でも、詳しくは言いたくないの。思い出したくないことも多いから。ただあなたは、私が心からあなたに感謝してるっていうことをわかってください。ほんとうに、助けられたの」

「そう。……帰ってしまうのか。清河とは逆になるね」

「そうね。このごろ私、思うの。清河も唐での永住を決意したとしても、長い生活の間には、望郷の思いにかられたこともそれはあっただろうなって。高元度が迎えに来たときも、ほんとうはどうだったのだろうか」

「そう、人の気持ちは揺れるものだね。あることを決意して、その通りにやっても、その人の心には迷いや後悔があつてふつうだ。人の心は複雑だ。自分で自分の心がわからないことだってよくある。清河の心も木や石ではなかっただろうしな」

帰るまでに一日、バイクに乗せて清河の物語にゆかりの場所を巡って見せてくれないか、もう一度見たい場所もあるから、と呉小玲が頼むので、ぼくはもちろん承諾した。

次の日曜日、ぼくは近鉄奈良駅に彼女を迎えた。幸い日射しは強かったが、バイクに乗っての体感温度は低い。アパートに戻って、彼女にはぼくの古い革ジャンパーを着せ、手袋も貸した。どちらもサイズが合わず、おかしかった。

東大寺、春日大社、平城宮址、唐招提寺……。ぼくたちは清河の足跡を追うように、喜娘の幻を探すように巡った。この数カ月、清河の物語の制作にかなり熱中していたの

で、頭はクランクイン中の映画監督のように清河の時代に入り込んでいた。それは呉小玲も同じだったのだろう。物語の場所に立って、ぼくたちは今までになかったほどさかんにしゃべり合った。しきりに写真を撮った。

初めて呉小玲と出会った平城宮址は、早なつかしかった。あれからほぼ半年が経っていた。駐車場にバイクを停め、復原された宮内省の建物や内裏址を歩いた。街に近い、広い野原のような場所だが、まだ人出は少なかった。大極殿址の壇に昇る。ぼくはいつかと同じように礎石の一つに足を投げ出して座り、朱雀門の方を眺めながら彼女に風の声の話をした。あの時は風の声を聞いたのでぼんやりしていたのだと。呉小玲も腰を下ろした。

「おもしろいわ。風の中に声が包まれていて、それが聞こえるなんて。誰の声なんだろう。昔の人の？それとも今の人の？」

「わからない。両方あるかもしれない。たとえば清河の声、喜娘の声が残っているかもしれないよ。今しゃべっているぼくらの声が、また風に包まれて残って、未来の誰かが聞くのかもしれない」

「すてきね。ではいっぱいしゃべっておきましょう。大きい声がいいかな」

「ああ。その方がいいだろう」彼女は笑った。しかし早春のおだやかな日で、風はあまりなかった。

近年復原された、真新しい朱雀門はさまざまに想像を誘った。清河、阿倍仲麻呂、鑑真、喜娘——皆かつて、この門をくぐったはずだ。朱雀大路をかたどる前の広場を歩き、石のベンチに座って門を振り返ると、日の光に金色の鴟尾が輝いていた。天平の人々——貴族も民衆も渡来人も、さまざまな感情でそれを見上げたにちがいない。

西の京。唐招提寺の南大門を入ると、やはり鴟尾のある金堂の大屋根の量感がすばらしかった。また基壇の端から眺める円柱の列と庇や垂木の階調、内陣の千手観音など魁偉な三体の像。講堂、東側の礼堂に沿って歩いて鑑真廟。西に折り返し、下って戒壇。ぼくらは恋人どうしのように寄り添い、写真を撮り合った。近くの薬師寺にも寄った。新しい朱塗りの西塔の基壇の上から眺める東塔の美しいフォルムは早春の青空に映え、いつまでも見飽きなかった。金堂の白鳳仏。朱塗りの回廊。

まだ時間があったので、思いついて西の京から足を伸ばし、生駒山に登り、スカイラインを走った。呉小玲はぼくの胴に手を回し、背中に身を寄せてきた。切り裂いてゆく風はさすがに冷たかったが、しかしその冷たさが心地よくもあった。その時ぼくは軽い興奮にとらわれていた。一つの悲しみと、それと裏腹な未来を生きようという感じとを同時に味わっていた。何かが終わりにかけているのだとさとしたが、同時に自分の人生はまだ終わらないともわかったのだ。そしてそれは、背後から温もりを伝えてくる呉

小玲にしてもまったく同じことなのだと思った。

暗峠くらがしに行ってみた。かつて奈良と大阪を結んだ街道の峠で、古代の遣唐使たちも行き来した道だろう。今はすっかりさびれているが、路面の石畳や街道沿いの家並みの古りたたずまいは長い歴史の時間を溜めていた。

また少し走ると、山の高みに展望台があった。車の姿のない広い駐車場にバイクを置き、少し登った。簡単な木組の施設の上に立つと、大阪側と奈良側両方が一望にできた。もう色づいた光が雲や街を染めかけていた。春霞の中に淡路島も横たわっている。海が広がった。この西側が「おし照る難波」、東側が「あをによし奈良」だとぼくは説明した。節刀を授かって清河らが進んでいた道を、平城京のあたりから、山を越え、海に向かうまでずっと指でたどってみることができた。その二十七年後、父の故国を訪れた喜娘がたどってきた道も、明石海峡あたりからずっと示すことができた。そしてまた呉小玲の来た空、帰ってゆく空も。

夜。清河邸。

火影のもと、清河が筆をとって紙に向かっていている。終わりにかけたところへ、喜娘が就寝の挨拶にやってくる。もう十歳を過ぎた喜娘のくつきりした顔立ちには、少し大人びた美しさと幼さが同居している。

「お父様は、何をしていたらっしゃるの？」日本語で問う（もちろん、中国語の字幕）。その日本語は、学習した外国語のようにゆっくりで少し固い。清河はほほ笑み、

「日本へ手紙を書いているのだよ。新羅の使に日本まで運んでもらうのだ」

清河の顔や頭髪には、もう五十歳を過ぎた感じのメイクが必要だ。声も低く、落ち着いている。清河は手招きして喜娘を前に座らせ、視線を時々宙に漂わせながら日本のことを語る。

咲く花の盛りの平城京、東大寺の大仏殿の麓、春日野で花や枝をかざして群れ遊ぶ人々の映像がオーバーラップ。遊ぶ人々の中には、若いころの清河も妻子もいる。それがしだいに消えていって、喜娘の大きな瞳に収斂する。

続いて、清河、病床の場面。

清河は加齢と病とでやつれ、さらに老けている。そばにもう二十歳になり、美しい娘に成長した喜娘。色白で髪は長く、くつきりした目には濡れたような光があり、あでやかな唐服に包んだ身はすらりとしている。清河が掛け布から片手を出し、宙にさまよわせながらか細い声でいう。

「朝衡先生、来了嗎（朝衡さんはいらっしゃったか）？」
チャオホンセンシヤン ライラマ

喜娘は父の手を取り、両手で温めるように包みながら、

「没来（いいえ、いらつしやいません）。お父様、朝衡様はもうとつくに亡くなられたではありませんか。夢を見ていらつしやったのですね」

「そうか。そうだったな……。立派な方だったのに、惜しいことをした。天の原 振り
放けみれば……」

「春日なる 三笠の山に 出でし月かも」

清河の宙を見つめる目は濡れがちだ。

「お父様はまた日本を思い出していらつしやるのですね。日本很好嗎（日本はよい所で
すか）？」

「対（そうだ）」

「奈良是个美麗的 地方嗎（奈良は美しい所ですか）？」

「那是很美（それはもう、美しい）」

「您還是想回去嗎（お父様はやっぱりお帰りになりたいの）？」

「不（いや）……。私は、この国で生きることを選んだ。それは、間違いではなかった。

いろいろとあつたが、私は、この国で幸福だったよ。おまえのお母さんにも出会えた。

おまえも生まれてきてくれた。本もたくさん読めたし、多くのすぐれた友人も得た」

「でも、お父様。元気になって一度日本へ帰っていらつしやい。いえ、きっと私を日本
へ連れていってくださいな。お父様の国へ。まもなく次の遣使が来るかもしれないと、
この間、羽栗様も申しておられましたよ」

「そうだな……。元気になれば、一度帰ってくるか。おまえを連れて。おまえにあきづ
島大和の国を、ぜひ見せてやりたいものだ……。皇帝陛下も、もうお許しになろう」

七七八年、もう清河は六十一歳、その正月。

日本からの第十四次遣唐使が来朝。前回の高元度の時から実に十九年目だった。今回
は大使が急病で来られず、代わって執節使となったのは副使の小野石根。おののいわね。

石根は長安に着くと休む間もなく清河を訪れ、光仁天皇の親書と位記、天皇授与の絹、
布、砂金などを手渡した。清河はかろうじて病床に起き上がり、謹んで受け、そして日
本朝廷の厚遇に感謝する。日本の朝廷で、自分はなお在唐大使のまままで従三位の高位に
列せられているという。涙があふれざるをえない。

聞けばもう、あの権勢を誇った従兄の藤原仲麻呂も、とつくの昔に乱を起こして滅び
てしまったという。帰国して右大臣の位にまで昇りつめたあの秀才、吉備真備も、つい
先年薨去した。鑑真和尚、光明皇太后、孝謙上皇もすでに世になかった。天皇家も一世
紀も続いた天武天皇の系統が終わり、その兄の天智天皇の系統が復活したという。日本
の世の移り変わりは、事件も人物も世情も、もう清河のよく理解がとどくふうではな
かった。

清河は小野石根に、かすれる声を励まして自分の残してきた家族や親族のことをたずねる。また春秋の、春日野での遊びのようすを訊く。そしてまた涙を流す。

かたわらの床几に、あの羽栗兄弟が仲よく並んでひかえている。兄の翼はこのたび遣唐使准判官として、四十三年ぶりに生まれ故郷の土を踏んだのだった。弟の翔とも十八年ぶりの再会だった。二人とももう還暦が近く、そろって鬢髪を白くしている。

次は、清河臨終の場面。

喜娘とその母が泣いている。遠巻きにする従者たち。屋敷の門前には貴顕や高官を乗せた立派な馬車が、あわただしく次々に到着する。やがて皇帝からの弔問使もやって来る。

寝台の清河はすっかり痩せてはいるが、やすらかな顔をしている。その顔を見つめていた喜娘が、涙を溜めた緑の瞳の大きな目をゆっくりともたげる。

その次はもう、冬十一月五日、長江河口に近い蘇州の港、遣唐船の解纜の場面。

百人余の男たちが忙しく動きまわる中心に、執節使小野石根と皇帝から遣わされた唐使趙宝英が立っている。そして二人のそばには喜娘が。白い喪服の裾を寒風になびかせ、胸には清河の遺骨を納めた壺を抱いている。(お父様、これで半生を暮された唐国の景色の見納めですよ) というように。

三日後、東シナ海のただ中。だが夕方ごろから空はにわかにかき曇り、船は強風と大波に翻弄される。そばの船板にしがみつきながら金切り声で祝詞を読む神主、観音経を誦える僧侶たち。しかし夜さり、ついに強い波は舷側を破って船中におどりこんだ。たちまち水びたしになる船内、流失する船板、波にさらわれてゆく人々、闇間に消える叫喚。小野石根も趙宝英も、そうして冷たい水に落ちていった。

朝の光に見れば、船内には一片の食料も一すくいも残っていない。船荷も多くが失われている。そのまま、漂流する。

十一日未明、今度は帆柱が音立てて船底に倒れ、ために船は両断されてしまう。だがそれでも沈まず、船首と船尾とが二つに割れた卵の殻を水に浮かべたような不思議な状態で、波のまにまに漂蕩する。

船尾の方では、狭い空間に身を寄せ合っている四十余の人々。襲いかかる空腹と寒さと疲労。生きた心地もせず、絶望感が支配している。喜娘もその集団の中にいるが、ただその表情はどこか毅然としている。(このシーンの撮影は難しい。特殊撮影、あるいはコンピューターグラフィックスを援用)。

最後の「研究会」をして、呉小玲と別れた。部屋を出る時、軽く抱擁し合い、キスをした。駅まで送った。

呉小玲が帰国する日は、空港に見送らなかつた。友だちがたくさん送ってくれると言っていたし、ぼくには会社もあつたからだ。

その前夜、電話をした。彼女は喜んでくれた。深刻にはなりたくなかつたので、清河の物語の話をした。

「とうとう、完成できなかったね。残念だった」

「そうね。喜娘の物語ができなかつたね。日本にたどり着いた喜娘がどうしたか。……実は私ね、一人でやってみたの。あなたの話や、あなたにもらつた資料をもとにしてね。急いだから、プロットだけね。それに、あなたが気に入ってくれるかどうかともわからな。でも、今日投函したの。読んでくれますか？」終わりは少し笑いを含んでいた。

「当然啊タンゼンヤ（もちろんだよ）。つつしんで読ませてみましょう」

「私の思いがいっぱい詰まっています。ぜひ読んでください。請一定看吧チンイテイカンバ。それから、私のことを忘れないでください。不要忘記我……」

翌日、会社から遅く帰ってみると、少し大きめの封書が届いていた。宛名の端正な文字を見ると、胸に鼓動を感じた。封書の実在が、呉小玲の不在をたしかにもの語っているようだった。涙があふれた。部屋に入って灯りをつけると、すぐに封を切った。短い手書きの手紙とともに、パソコンの文章があつた。

十一月十三日、両断から二日後、喜娘らの取りすがつていた船尾の方は、九州肥後の国天草郡の西仲島に流れ着く。

島民の知らせを受け、郡役所はすぐに彼らを保護したが、一行のうち誰一人としてまともに歩ける者はなかつた。すぐ伝令が国府に飛び、国府からは大宰府に早馬が走る。知らせを受けた大宰府でも急ぎ都に使者を送る。

その間に喜娘らは弱つた身体を養いつつ、肥後の役人にもなわかれて大宰府へ向かう。そして大宰府から都への長旅。平城京に着いたころには、もう年が代わつて梅の花が匂い、都大路の柳が青々としていた。

清河邸。屋敷の庭中にも梅の花が咲き誇っている。しかし、宏壮な屋敷の中は人もまばらで、ひっそりした感じ。そこに喜娘が役人にもなわれて訪れる。蘇州以来の厳しい長旅であつたにもかかわらず、頬は若々しくほてっている。清河の老妻と年だけた娘が迎える。部屋に招き入れる。喜娘は深々と頭を下げ、

「唐からは、父の形見の刀や着物、遺愛の品、皇帝からの賜り物などもたくさん積んでまいりましたのですが、船の遭難のため、残念ですが、残ったのはこれだけです」と遺骨の壺をさし出す。老妻と娘は、初めて会つた異相の娘のなめらかな日本語に驚きつつ、小さな壺を受け取ると胸に抱いて泣きくずれる。

清河邸のすぐ南に接する唐招提寺。喜娘は、戒壇を拝み、鑑真和尚の御廟を拝する。中心となる金堂はちょうど建設にかかったところで、工人たちがせわしく行き来している。そばに、もう残り少なくなった鑑真の高弟の一人が付き添い、少し古風な中国語でなつかしげに語りかける。

宮中。光仁天皇に喜娘が拝謁している。御簾の内から、老天皇が親しく声をかけてくる。喜娘は、先年、遣唐使小野石根より天皇の親書と品物を下賜されたことを、父清河が大変喜んでいと礼を述べる。今次の旅や在唐中の清河のようすについて天皇があれこれとたずねるのに、喜娘は丁寧に、でも臆したようすもなくきっぱりと答える。日本語も正確でよどみがない。そしてその容姿の、妖しいほどの端麗さ。喜娘の話が一段落するたびに、そばに居並んでいる貴顕や後宮の女房の口から思わず嘆声が出れる。

喜娘はそれから清河邸に落ち着くことになる。屋敷を巡り、書齋や池のそばに若き日の唐をあこがれ勉強に精進していた父の姿を想像する。

一方、喜娘の話を聞こうと、またその姿を一目見ようと、屋敷には来客が絶えない。そのうち、求婚者もやって来る。喜娘に付けられた侍女のもとへ、男たちからの玉梓の使や進物がひっきりなしだ。しかし喜娘は、あのかぐや姫のように誰とも逢おうとはしない。そしてかぐや姫のように、夜になると月を眺めている。

月の面に、父の顔が浮かぶ。父も長安でよくこうして月を眺め、思い耽っていたものだった。「山川異域、風月同天（山や川は国土を違えているが、風吹き月渡る天空は同じである）」。そんな時に父がよく口ずさんでいた言葉だ。敬仏の心の厚かったあの日本の長屋王が、袈裟千領を海を越えて唐僧たちに贈ったとき、その袈裟の縁に縫いつけられていた偈句の一節だという。あの鑑真和尚も、日本の僧侶たちが初めて揚州の大明寺を訪ねたとき、その言葉を口ずさみ、渡海を承諾したという。唐と日本、両国は遠く離れているとはいっても、同じ天空のもとにあるではないか……。

庭の木々に、つむじ風が起る。その音に、喜娘は耳を澄ませている。
やがて喜娘の姿は、都からかき消える。

数カ月後、玄界灘を行く小船。小商人の娘に身をやつした喜娘が乗っている。その九州松浦あたりの海商の仕立てた私船は、いったん対馬に寄港し、一部積み荷を交換する。上島と下島の間、海の色美しい浅茅湾で数日間風待ちをした後、再び帆を上げて波荒い対馬海峡へと乗り出す。

舳先に立って、衣に風を孕みながら前方を見つめる喜娘。もう故国からの風を感じているように。やがて水平線に朝鮮半島南岸の低い連なりが、青く発光する臥龍のようにかすかに望まれてくる。

初夏。奈良公園を歩き、ベンチでぼんやりしていたとき、久しぶりに風の声を聞いた。風がふところを開いてふとこぼした、くぐもるような、叫びのような声だった。苦しもうとも楽しそうとも聞こえ、またそのどちらでもなく、ただ誰かの生きた証しのようにも感じられた。

突然、呉小玲の美しい顔があざやかに浮かんできた。するとすぐなつかしさが、いたたまれないほどあふれてきた。遠い上海から、彼女の声が風に運ばれてくるということがあるだろうか。いつかぼくの声が風に包まれて行って、彼女の耳もとに届くということがあるだろうか。

三月、無事な帰国を知らせる葉書が一枚届いた後、連絡は絶えていた。ぼくから便りをすることもない。そのうちに清河の物語が上海のテレビにかかるのかどうか、ぼくは知らない。いつかまた彼女に会うことがあるのかどうかもわからない。

親子連れがいる。幼い子供が歓声を挙げながら子鹿の方へ走り寄っている。若い二人連れが身を寄せ合い、ささやきながら歩いていく。また若葉を揺らして、透明な布をはためかせるように、自由に渡っていくものがある。

(完)